

「五重塔」——朗円上人のまなざし

一

幸田露伴が、その創作活動の始点において、著しく西鶴の影響を受けたことは周知のことである。しかしその影響も、もっぱら文体やリアリズムについてのみ言われていて、その他の点に論及されることは少なかつたように思われる。例えば文体は、直ちに語り手の特異なありようにながるが、この点への言及も少なかつたし、リアリズムという観点とは真っ向から対立する、西鶴文学の「はなし」性と、露伴文学との関連も論じられることはなかつた。「五重塔」も西鶴の影響の顕著な作品と言えるが、先ずは西鶴文学の「はなし」性の観点からその特徴をほぐして行こうと思う。

「五重塔」(『国会』明24・11・7、明25・4・19)は、露伴の初期作品に多い職人物の代表作であるが、主人公の大功のつそり十兵衛の、一見愚人のようでありながら、ふたを開けてみれば大変な名人だったという「はなし」のありようは、本文最終章の町のうわさでも取り上げられる、所謂甚五郎物の説話を髣髴とさせるものではなからうか。また、「五重塔」の物語のもう一つの「はなし」は、棟梁川越の源太と十兵衛の対立葛藤であるが、朗円上人が二人を前に披露する経文の「話」に、長者の兄弟の説話がいったように、二人の関係はこの小説では終始一貫、

兄弟の比喩で語られることになっている。であるとすれば、源太十兵衛二人の関係は世に言う「賢兄愚弟」の関係性を取り込み、さらに昔話に所謂「兄弟譚」の枠組みを持っているとも言えるのではなからうか。二人兄弟の話は「海幸山幸」の説話が有名であるが、これは結局弟が兄より成功するという結果に帰着するものである。以上のように見てくれば、「五重塔」は名人物(甚五郎物)に、兄弟譚を交差させるという、「はなし」の枠組を持ったものと言えるように思われる。

「五重塔」に見られる「はなし」性は、何も既成の話の枠組取りの問題だけに留まらない。例えば、感応寺の用人頭為右衛門や役僧円道らの、あまりにも型通りの俗人ぶりは、源太の弟子の清吉などとともに、比較的シリアスな「五重塔」のドラマにあっては、貴重な道化役として、立役の存在を引き立てる役割を果しているが、しかし、「法諱を聞けば其頃の三歳児も合掌礼拝すべきほど世に知られた」(其四)高僧朗円上人のお膝元の人物にしては、リアリズムの観点からすれば、あまりに上人の感化の及ばないおかしな存在になるのではなからうか。また、十兵衛が源太から「五重塔」建築の仕事を譲られ、完成させるまでの工期も、小説上ではどう見積っても半年ほどしかかかっていないが、元来世事に疎く、人望もない十兵衛が、いかに清吉の襲撃事件という出来事が偶々うまく機能したとはいえ、大勢の職人を束ねて、しかも完璧に大工事を

滝藤 満義

遂行するには、短すぎる時間と言わねばならないであろう。これも、十兵衛の超人的天才ぶりを際立たせる、「はなし」の手法と見なければ、およそ納得できることではなからう。松田修氏は「かたり」と対比させつつ「はなし」の特徴を、「興味＝面白さを第一義とする」ものであり、「事実か虚構かは、いわば二義的であって、それ以上の問題ではない。信じられてもよく、信じられずともまたよい、というよりは信じられることを頭から求めていない」と説明している。³⁾「五重塔」にも、このような「はなし」性を前提としなければ、理解に苦しむことが外にも多々あると言わねばならないであろう。⁴⁾

勿論露伴が近代作家である以上、既成の「はなし」の枠組を踏襲したり、誇張法により面白さを追求するだけでは、当然満足はできないであろう。それらを近代的に異化し、作者自身の自己表現にまで持って行かなくては、創作する意味がなかったであろうことは想像に難くない。無論「五重塔」はそのような近代小説としての、実質を備えた作品である。そして、この作品における「異化」の度合いは、主人公十兵衛の造形においてもっとも著しい。十兵衛にはモデルがあったらしいことは、作者自身「作家苦心談」⁵⁾に述べるところである。

此の倉と云ふ男も極めて妙な人物で、無学の聖人とでも云ふ趣のある、欲はなく、処世の才はなく、併し技術には頗る達してゐるやうに、私等の素人目には見えた。(中略) 一体その男は大変に詩趣のある男で、(中略) 当人も自分の腕のあるのは知つてゐるらしい、が碩徳(上野のある寺の僧＝筆者注)のおれが、と云ふ気を出してはいけぬと云はれた教を奉じて、力めてゐる趣があつて云々

十兵衛は、この倉という大工と、彼から聞いた「のツぼり」という偉い大工の名とを組み合わせたのだというが、しかしこのモデルの事実は

「殆ど半分しか使はなかつた」とも露伴は言っている。確かに倉という大工の「欲はなく」という部分や、「おれが、と云ふ気を出してはいけぬ」と云はれた教を奉じて、力めてゐる趣」は、決して十兵衛のものではない。むしろ十兵衛はこの点においては、倉と正反対の要素の方が強いであつた。

十兵衛には「無学の聖人」という要素も、「詩趣」も少しも感じられない。彼には欲もあれば、争気もあつて、朗円上人に次のように直訴せざるを得ないのである。

御上人様、五重塔は百年に一度一生に一度建つものではござりませぬ、恩を受けて居ります源太様の仕事を奪りたくはおもひませぬが、あゝ賢い人は羨ましい、一生一度百年一度の好い仕事を源太様は為るゝ、死んでも立派に名を残さるゝ、あゝ羨ましい羨ましい、大工となつて生てゐる生甲斐もあらるゝといふもの、それに引代へ此十兵衛は、鑿手斧もつては源太様にだとして誰にだとして、打つ墨繩の曲ることはあれ方が一にも後れを取るやうな事は必ずく無いと思へど、年が年中長屋の羽目板はねめの繕ひやら馬小屋箱溝の敷仕事、天道様が智慧といふものを我には賜たまさらない故仕方が無いと諦めて諦めても、拙い奴等が官を作り堂を受負ひ、見るものの眼から見れば建てさせた人が気の毒なほどのものを築造たてへたを見るたびごとに、内々自分の不運を泣きますは、御上人様(其六)

右のごとく十兵衛はかき口説き、源太が見積を出したと知つた夜「五重塔を汝な作れ今直つくれと怖しい人に吩咐いひつけられ」たと訴えるのであるが、ここには明らかに彼のエゴ、名誉欲や出世意識が透けて見えると言わねばならない。倉のような無欲や謙遜は欠片も見当たらない。それに彼は、自分が常々誰にも理解されないと、「これだけが誰にでも分つて呉

れ、ば塔も建てなくてもよいのです」と言うが、実は十兵衛自身、誰をも理解しようとしなない人なのである。彼はほとんど自分にしか関心が持てないのであり、その点では彼は、江戸の町に生きながら、まぎれもない近代人であったのだ。そのような眼で見れば、朗円上人への直訴も、社会的な中間項を飛び越えて、いきなり普遍的なもの（神）に対面しようとする近代人の内面のありようを髣髴とさせてしまうのである。

十兵衛が以上のように「異化」されてあるとすれば、彼が作りたいたい願う「作品」五重塔も、彼の内面の表現、即ち自己表現のようなものにならざるを得ない。しかしそのような欲求を盛る器として、果して五重塔のような建築物はふさわしいのであろうか。甚五郎物の説話でも、彼の名人技の語られるのは、建築物よりは彫り物のような個人技においてであった。露伴の職人物でも、「風流仏」の主人公は仏像彫刻師で、彼に近代芸術家の自己表現欲を仮託してもそんなに違和感はなかった。だが十兵衛は大工であり、五重塔を建てるのである。このような建築物、特に塔などは伝統的に洗練された工法に忠実に従わなければならないのであり、しかも大勢の職人による合作であることが宿命付けられている。十兵衛はわずか五六日で五重塔の「五十分の一の雛形」（其六）を作り上げたという。清吉の言うように「仕事といへば馬鹿丁寧」（其十七）で、のろさが持ち前のような十兵衛には信じられないほどの早業である。しかしそれは「はなし」の部分と納得して読むにしても、雛形の五重塔は十兵衛一人で出来るものの、本物の塔は一人では作れないのである。歌舞伎の脚本に例えれば、五重塔はいわば「世界」に当る部分で、伝統的枠組はむやみと自己流に改変を許されないものである。作者あるいは作者グループに創作の許されるのは、その「趣向」の部分でしかなく、しかもこれは決して、作者の自己内面の表現までは担いにくい創

作部分ではなからうか。露伴は近代芸術家の自己表現への欲求を担わせるには、まことに不向きな職業の主人公を選んでしまったと言わねばならないが、果して露伴はこのことに自覚的であったのだろうか。

源太の方も、兄弟譚の兄、例えば海幸彦のように弟に難題を持ち出すような人物ではなく、多少の異化が試みられている。彼にもモデルがあった「越後の人で源太といった名工」（「作家苦心談」）を、名前もそのまま使ったようであるが、この大工の人柄については露伴は何も語っていない。ただ彼は、十兵衛のように近代芸術家のような風貌が期待されていないだけに、その職業や時代ともマッチした、まことにクリアなブレのない人物像に仕上がっている。彼は大工としての腕は勿論、棟梁としての統率力もあり、人情の機微もわきまえた人物で、それに何より世間を立派に生きている人物である。これを多くの論者が言うように良識的の「市民」というのは当たらない。彼はあくまで「世間」に生きる人である。その彼が、十兵衛の無謀な横槍に譲歩し、塔を二人で建てよう⁽⁶⁾と提案したり、さらに十兵衛にすべてを任せることになった後、自分の側の資料を提供しようと申し出たりした行為を、芸術の何たるかを知らぬ行為と貶めるのは、ますます当たらない。なぜなら、彼は建築というもの⁽⁷⁾が、世間と同じく、人と人との関係性の中でしか遂行できないものであることを熟知した、江戸の職人であるからである。建築という場において、共同企業を拒む十兵衛の方が、むしろ異様なのである。これは、近代の建築においても、それほど事情は変わらない筈である。

二

朗円上人の存在は、前節に想定した甚五郎物や兄弟譚の「はなし」に

は登場せず、露伴が独自に作品世界に作り出した人物である。あるいは先にもふれた「作家苦心談」に言う大工の倉が、その教えを尊奉していたという「上野の或寺」の「碩徳」あたりが、ヒントになって登場せしめられた人物かもしれない。ともあれ上人の登場は、次のような頌歌によって飾られている。

早くより身延の山に螢雪の苦学を積まれ、中ごろ六十余州に雲水の修行をかさね、毘婆舍那の三行に寂靜の慧劍を礪ぎ、四種の悉檀に濟度の法音を響かせられたる七十有余の老和尚、骨は俗界の葷羶を避くるによつて鶴の如くに瘦せ、眼は人世の紛紜に厭きて半睡れるが如く、固より壞空の理を諦して意欲の火炎を胸に掲げらるゝこともなく、涅槃の真を会して執着の彩色に心を染まざるゝことも無ければ、堂塔を興し伽藍を立てんと望まれしにもあらざれど、徳を慕ひ風を仰いで寄り来る学徒のいと多くて云々(其四)

要するに、長年の修行の末に悟りを開き、多くの人々に慕われ尊敬される高僧ということになるであろうが、この老僧の精神の高さ、あるいは視点の高さの作品内への取り込みは、「五重塔」並びに露伴文学にとつて、かなり大きな意味を持つように思われる。

一つの塔に二人の番匠が並び立つことになってしまったのは、無論十兵衛の横槍のためではあるが、より根本的には、朗円上人の十兵衛評価にあると言わねばならない。源太に対する評価は、既に実績もあり、上人の中でも確立されていたであろうが、十兵衛に対するそれは何処から来たのであろうか。勿論最終的には、上人が雛形を見たことにより確立されたであろうが、実はその前に、十兵衛の述懐を聞いただけで上人は「あゝ殊勝な心掛を持つて居らるゝ、立派な考へを蓄へてゐらるゝ、学徒どもの示しにも為たいやうな」(其七)と感じ入っているのである。

先にわれわれが、近代的なエゴや名誉欲、出世欲を見出していた部分において、それでは上人は何を見たのであろうか。おそらく上人は、そのような欲望は欲望として認めながら、それを補って余りある十兵衛の、仕事や技芸に対する誠実や熱意が、彼の述懐には籠っているのを認めたのではなかったであろうか。であればこそ、雛形を見てその力量を確認した後に「假令ば木匠の道は小なるにせよ其に一心の誠を委ね生命を懸けて、欲も大概は忘れ卑劣き念も起さず、唯只鑿をもつては能く穿らんことを思ひ、鉋を持つては好く削らんことを思ふ心の尊さは金にも銀にも比へ難きを、僅に残す便宜も無くて徒らに北邙の土に没め、冥途の苞と齎し去らしめんこと思へば惘然至極なり」(其七)と、心から同情することが出来たのである。

二人の番匠のどちらを選ぶかについて、朗円上人が解決策として用いたのが、結局二人の相談に任せるといふものであったのは、何を意味するのであろうか。経文にあるという長者の二人の息子の説話とともに検討する必要があるであろう。上人はあくまでも仏者である以上、神のごとく振舞って、二人の關係に自ら決着をつけようとしたのではないことは明らかである。おそらく彼の中には、どちらを選ぶかの結論など何もなかったのである。上人はただ、二人の人格の良質の部分に賭けようとして、両者の相談を言い出したのではないか。ついでに話した説話のメッセージは、兄弟互いに譲れという単純なものに過ぎなかったであろうが、これはおそらく大工の倉の尊奉する上野の寺の「碩徳」の「おれがと云ふ気を出してはいけぬと云はれた教」に通ずるものであろう。ともあれ朗円上人の決裁を期待して感応寺に赴いた二人に、ボールは投げ返されてしまった。爾来二人は、あたかも難しい経文を読み解くように、朗円上人の計り知れない胸のうちを読んで、答案を出さなくてはならなくなっ

たのである。上人の結論が空白であることを知らぬままに。

源太十兵衛の二人が様々な対立葛藤の末に出した結論は、いずれも再び上人に下駄を預けるといふものであった。このことを源太から聞いた上人が、タイミングを見計らうように、兄が弟に譲るよう促したのは、日本的調和者の面影が、仏者のそれをこの時一瞬しのいだように思われる。

上人はくく笑はれ、左様ぢやろ左様ぢやろ、流石に汝も見上げた男ぢや、好いく、其心掛一つで既う生雲塔見事に建てたより立派に汝はなつて居る、十兵衛も先刻に来て同じ事を云ふて帰つたは、彼も可愛い男ではないか、のう源太、可愛がつて遣れ可愛がつて遣れ、と心あり氣に云はるゝ言葉を源太早くも合点して、ゑゝ可愛がつて遣りますとも、といと清しげに答れば、上人満面皺にして悦び玉ひつ、好いは好いは、嗚呼氣味のよい男兒ぢやな、(其十九)

調和者の言とはいえ、右の上人の言葉を方便としてのみ受け止めるのは間違ひであろう。上人はおそらく、心底から源太を「其心掛一つで既う生雲塔見事に建てたより立派に汝はなつて居る」と思ったのであり、「嗚呼氣味のよい男兒ぢやな」と思ったのである。したがって最終章の、「江都の住人十兵衛之を造り川越源太郎之を成す」は、上人にとっては本音であり、書かざるを得ない銘文であった。その後再び兄弟の仲に對立葛藤が生じたとしても、それは塔が現実建つためには、不可欠なイニシエーションに過ぎなかつたのである。

十兵衛に塔建築の命が下りて後、朗円上人は源太を呼び、陰になつて十兵衛の仕事を助けてやるよう命じ「十兵衛が手には職人もあるまい、彼がいよく取掛る日には何人も傭ふ其中に汝の手下の者も交らう、必ず猜忌邪曲など起さぬやうに其等には汝から能く云ひ含めて遣るがよい」(其二十一)と諭したという。このことは上人が、十兵衛の棟梁として

の未熟をしっかりと認識し、源太の助力を必須と考えていたことを示すであろう。そして上人の要求の前半の職人の手配については、源太は忠実にそれに応え、この点については、十兵衛との池之端の決裂後も変らなかつたはずである。ただここを以て「川越源太郎之を成す」の内実と解するのは現実的過ぎるであろう。先にも述べたように、苦惱の末源太が内心の欲を断ち切り、十兵衛に仕事を譲つた時点で、この銘文の内実は満たされたと考えるべきであろう。上人の要求の後半については、源太はついに上人に応えることができなかつた。清吉が十兵衛襲撃事件を起してしまつたからである。しかし考えてみれば、清吉の行為は、源太の十兵衛に對する内心の怒りの代替行為でもあり、十兵衛も十分にその怒りを受け止めるべき罪を犯していたのではなかつたらうか。そして結果的には清吉の跳ね上り行為が、棟梁十兵衛にとつてもっとも不足していた、人心掌握術を会得せしめることになつたのであつた。清吉事件は、そしてその元になつた池之端の決裂事件は、十兵衛が一人前の棟梁になるためのイニシエーションであつたのである。

五重塔完成とともに江戸の町を襲う嵐の場面は、物語的には十兵衛の建築した塔が天意にもかなうものであることを証するためのものであるが、「作家苦心談」によれば、露伴の実体験を執筆中の作品に取り込んだもので、最初からの構想ではなかつたという。露伴の体験がいつのものであつたかについては、登尾豊氏の考証があり、それが明治二十四年九月三十日の台風を置いて外にないことが明らかにされたが、なぜ小説では、季節的にまねな一月末の嵐に使われたのであるかは、今ひとつわかりづらい。これも一連の「はなし」的なのと考えておくのが便利である。さてこの嵐に、用人や役僧ら俗物が騒ぎ立てる中、十兵衛は「何の此程の暴風雨で倒れたり折れたりするやうな脆いものではござり

ませ」(其二十三)ぬと、いかにも天才らしく見得を切っているが、棟梁が天才であろうがなかるうが、其工法が伝統的な作法になつてさえいれば、五重塔はそもそも倒れるものではないのである。歴史的にみて、五重塔が地震や台風に極めて強いものであることはよく知られているが、今日の建築学でもその謎は解明され切つてはいないらしい。いづれにしろ春の嵐くらいでは、柔構造ゆえ揺れこそすれ、倒壊など考えられもしないものなのである。げんに、モデルである谷中天王寺の五重塔は地震や風で倒壊したことはなく、二度とも火災によって消失しているのであった。

「五重塔」最終章は、その主要な部分を、嵐が過ぎて後の世間のうわさ話を拾い集めて構成しているが、そこで語られる建物倒壊の原因は、まことにリアルで、十兵衛の天才物語を、作る傍から壊しているような感もなくはない。例えば「横町の生花の宗匠が二階」が「御神楽」故に倒壊したとか、江戸で一二の大寺が脆くも倒れたのは「多分の寄付金集めながら役僧の私曲、受負師の手工品」によるとか言っているからである。それならば倒れたものは、いづれも違法建築や手抜き工事のようなものばかりということになるのであるから、十兵衛の五重塔が「釘一本ゆるまず板一枚剥がれざりし」ことは「舌を巻」くほどの出来事ではなく、彼がただ誠実で手抜きをしなかったことに帰着してしまふからである。池之端の決裂において、源太が「三年なりとも十年なりとも返報するに充分な事のあるまで、物蔭から眼を光らして睨みつめ無言でじつと待つて、呉れう」(其二十二)と仕返しを誓つたのも、ことは、一寸ばかりの手抜きも、作法にかなわぬ仕様もないかどうか、それを最後まで見届けてやろうということだったのである。竣工直後の嵐は、三年も十年も待たないで源太がそれを確かめられるようにするための、物語的便法

でもあった。嵐の夜、「風雨いとはず塔の周囲を幾度となく徘徊する、怪しの男一人」(其二十四)とは、言うまでもなく、早くも廻つて来たこのチャンスに、源太のそれを確かめようとする姿にほかならなかつた。

三

本稿の始めに、西鶴文体の影響から、語り手の類似が導けることを示唆しておいたが、西鶴の描写の態度(語り手の設定法)には、彼が晩年になつて作家生活に入つたせいもあるうが、何処となく余裕が感じられるのが常であつた。一種達観した眼で人の世の実態や、「世の人心」を眺め、それが彼の作品の客観的傍観的即物的な描写を生み、近代的リズムと見紛われることにもつながつたと思われる。しかしこのような態度が、未だ二十代中頃の露伴に自然に身につくはずはなく、そのギャップを克服するべく導入されたのが、朗円上人の如き仏者の悟り済ました境地であるように思われる。

前節でも見たように、朗円上人は、十兵衛源太対立する二人の番匠の、能力も人柄も(おそらくその欠点も含めて)ともに肯定的に評価できる人であつた。それが彼の仏者らしい高い境地であつた。例えば十兵衛に對しては、彼の我執にまみれながらも、一途にその職業に打ち込む精神を、「殊勝な心掛」「誠実の心」(其七)と評価し、「可愛い男」(其十九)と言いつ切っているし、源太に對しては、彼が二転三転、我欲と人情の板挟みに苦しみなながらも、最後にきっぱり我欲を捨て去らうとするのを、「生雲塔見事に建てたより立派」(其十九)な心掛けと評し、「見上げた男」「気味のよい男兒」(同)と感嘆してやまないのである。それでは、上人のような一登場人物とは違ふ、この作品の語り手は、十兵衛源太の

二人をどのように捉え、どのように語っているのであろうか。

一つの小説作品の語り手である以上、登場人物をできるだけ客観的に読者に伝えるのは、「彼」の務めであろう。「五重塔」の語り手も、できるだけ写實的に個々の人物を描写し、また他の登場人物を通して当の人物を語らせるなど、客観的表現に努めていることは確かである。近代小説の語り手は、そのようにして自らの人格的影を消し、できるだけニュートラルな存在に自己を仕上げてきた。しかし、近世小説の伝統の色濃い支配を受けていたわが明治の作家達には、そのような語り手の創出は、至難の業と言っても過言ではなかったであろう。「五重塔」の語り手も、客観描写の端々に、自らの主観を差し挟まないでは、この物語を遂行できなかつたのである。例えば十兵衛に関しては、「此方の心が醇粋」(其五)、「礼儀に嫻はねど充分に偽飾なき情の真実をあらはし」(其六)、「嗚呼いぢらしや」(其八)、「言葉は無くても真情は見ゆる十兵衛が挙動」(其二十二)、「一枚の図をひく時には一心の誠を其に注ぎ(中略)精神は紛たる因縁に奪られで必死とばかり」(其二十三)等々が、その例である。また源太に関しては、「万人が万人とも好かずには居られまじき天晴小気味のよき好漢」(其八)、「義には強くて情には弱く意地も立つれば親切も飽くまで徹す江戸ッ子腹」(其十五)、「職人らしき俠気の風」(其二十一)「磨いて礪いで礪ぎ出した純粹江戸ッ子粘り気無し」(同)、等々が挙げられよう。

右の語り手の、二人の人物に対する主観を差し挟んだ評価を、先の朗円上人のそれと比べてみるとどうであろうか。われわれは、両者にほとんど差異を見出すことができないのではなからうか。とすれば、「五重塔」における朗円上人の存在は、他の登場人物と同格の一人物ではなく、特殊な意味合いを持たされた存在ということになりはしないか。という

より、悟り済ました老僧の境地を観念的に先取りして、作者露伴は語り手を同じレベルに引き上げるべく、朗円上人の登場は、作品内における作者のアーカイ作りにはかなならなかつた。そのような眼で見れば、朗円上人が言及しなかつた他の登場人物も、同じような高みから語り手によって見られ、そのあるがままが、肯定的に、許されてあるように思われる。「五重塔」には、しばしば指摘されているように、所謂悪人は一人もいない。十兵衛源太の女房、お浪もお吉も、それぞれ気は狭く、我執に囚われがちながら、一途に夫を思っているその心根の純粹さにおいて許され、清吉も、思慮の足りない跳ね上り者ではあるが、正直で、親方夫婦を思う気持の純粹さにおいて許されているのである。それは為右衛門、円道のような典型的な俗物においてさえ、例外ではなかつた。彼らは俗物とはいえ、嵐で倒れたどこかの大寺の役僧のように、多額の寄付金を私するような悪とは無縁であつた。そればかりか、彼らの正直な世才は、お堂を建ててもなお「大金」を余し、感応寺に塔を作ることが可能にしたのみならず、さらに余つた金を落成式の日には貧者に施すことをも可能にしたのであつた。

「五重塔」の語り手の、このような視点の高さを確認すれば、三十一、三十二章における飛天夜叉王の視点も、さして違和感を与えないのではなからうか。彼ら仏法守護の天人らが、「天の心」(天意)を帯して、正直や、誠実さや、純粹さ等、「天の心」に通ずる普遍的なものを分かち持つ人々と、それらを失い、傲慢に振舞うようになった人々を峻別し、前者には許しを、後者には罰を与えようとするのも、案外「五重塔」の語り手の姿勢とパラレルなものと思われるからである。無論自然現象としての嵐を、このような寓意に満ちた表現で語るの、これまでの「五

重塔」の語りとは明らかに違い、およそ近代小説の写実小説化への流れに逆らう方向性を持つが、これは、この小説あるいは露伴小説がこの時期選んでしまった視点の高さが、あるいはそれゆえの観念性が、自ずと招きよせた方向性だとも言わなければならないであろう。これに関連して、「五重塔」執筆に至るまでの一年余の露伴の文芸上の煩悶の実態を見ておく必要があるように思われる。

四

明治二十二年「風流伝」で鮮やかに文壇にデビューした露伴は、早くも翌二十三年中頃には芸術上の動揺、煩悶期に入っている。その煩悶の内容の一半は早く、明治二十三年七月十日(推定)付けの坪内逍遙宛書簡によって窺うことができる。上州赤城山地獄谷から送った書簡である。そこではこれまでの自分の文学活動を支えてきたという、「風流」に関する疑問が語られている。

自分は「文筆にたづさはりし此方常に一心風流々々と目ざし」てここまでやって来た。そして自分は、これまで「正理に協ふ情を風流といふものと大安心し」ていたけれど、このごろ「自分の情も無風流に働く時のあるを見付け」るようになってしまった。第一今まで風流と思ひ込んで作ってきた小説も、初期の芭蕉が「幻術者が作り出せし舞台を仮りに名づけて其世界と欺」いたように、自分も「小説と名づけて人を欺む」いたものではなかったか。そこへ行くと晩年の芭蕉の作には「一毫の私念なく天地の妙を天地の妙と其まゝにあらはし」、「人情の妙を人情の妙と其まゝあらはし」て決して巧んでいない。「一も芭蕉が作の句はなく芭蕉が所有と執し着すべき句もなく芭蕉が作りし人形山川草木の美を見

出せしにはあらずして元より有る人情万象を其まゝ芭蕉は炬火を把り若くは月となつて照らし出したるばかり」と考えられる。小説でもここまで来なければだめではないか。「畢竟作者が所有の私天地なるものあるべき筈ならねば詩人が作りし詩ならば是れ詩人が自らの妄想胡思の異形怪物か左なくとも無血無氣の影像を紙上に躍らせしのみにて未だ真風流の真小説」とは言い難い。自分は「リアルと世の云ふ実に偏する」つもりはないが、「到底妄想撲滅にあらずんは無茶ならさる小説はならず大真如界に住せすんは好句も好小説もならず終に善人とならずんは詩人にはなれず学問勉強修辞苦勞は末の末」である。「風流第一は生死関頭に妄想を切る事」だ。

長くなったが、以上が所謂地獄谷風流書簡に見る、露伴の煩悶の概要である。これは言うまでもなく、作為の否定こそが真風流の真小説を成す所以であることを説くものである。翌明治二十四年三月、露伴は青年文学会において「本箱退治」という題で講演しているが、その筆記を見ると、これが前年の逍遙宛書簡の問題を、そのまま引きずったものであることがわかる。

「本箱退治」とは先の書簡で言えば「妄想撲滅」のことである。ここでは「本箱」は「我」の代名詞として使われる。したがって「本箱退治」とは個々の「我」を捨て去ること、いわば小我を捨て大我につくことを意味する。露伴は先ず、「自分一流の一ツの箱を造り其箱の中へ外の人を引き込むは善いが、併し古人の造つた箱の中へ潜り込むは男子のしない所」だと、『早稲田文学』(第28号、明25・11)の書評(小説五重塔)に所謂「露伴子が特色主義」を主張するが、しかし彼にとって、これも究極の理想にはなり得なかった。これでは依然として私的な本箱に過ぎない、「実に作者一人の胸中から出たのは妄想文章で仕方がない」、一

篇の詩を作るにも「無際限の心」が必要なのだというのである。これより一年前の「井原西鶴」(『国民之友』明23・5)で露伴が「我嘗て愛鶴軒子と西鶴都の錦の優劣を論じて曰く、都の錦は都の錦が所有せる本箱の中より都の錦を現出し来る、西鶴は然らず、直ちに西鶴が虚空蔵より西鶴を見出し来ると」と述べていることも思い合わされる議論である。

このように見てくると、明治二十三年から二十四年、即ち「五重塔」が構想され執筆される前一年余りの、露伴の煩悶期を通じて一貫して追究されていたものが、「妄想撲滅」「本箱退治」等表現は様々だが、「我」あるいは作爲の否定であったことは明らかであろう。それは方法的には必然的に写実主義に傾斜することになるが、しかし、この期において、露伴はそれほど明確な方法論を打ち出せたわけではない。先に述べた「本箱退治」の二段階評価、即ち「特色主義」あるいは個性、理想と、「妄想撲滅」あるいは自我没却、没理想と、両価値の間には主観的な優劣がついているだけであった。「本箱退治」の最後で、露伴が「其れでは文章は何所から来るべきか、矢ツ張り分らぬ。今日では到底私には分らぬが、併し何か考へて見るに本箱を打ち毀す事を一ツの趣旨として然して自分の胸中にある垣根を打毀し、然して広い所のものにしたらば、茫漠として分らぬ所に却て無偏無私の立派な文章が出来やしないかと考へる」としか言えなかつた所以である。

明治二十四年八月、露伴は「風流悟」を『国民之友』に発表した。この小説は恋人を病気で亡くした男の手記という体裁のもので、一見キリスト教的とも言える、露伴のプラトニックな恋愛観が披瀝されている。即ち「位階、爵祿、門閥、容貌、言語、衣服、金銭等」に対する欲望、いわば煩惱のほしいままな跳梁に身を任せ、そのため「血、汗、涙の世界」にしか住し得なかつた自分が、彼女との恋愛によって恋の牢獄に落

ち、悟りの境地に入ったというのである。ただこの作品のテーマとして、単なる一恋愛観を読み取るだけでは不十分で、表題からも推測されるように、これはむしろ「悟」の方が第一義的テーマであるとも言える作品なのである。例えば「全、美、大の世界」に住む彼女、自分を愛してくれるとはいっても、「全く乞食を愛し盲者を愛し、罪に壞れたる道路を繕ひつゝある囚人を愛することとき有様にて我を愛せしのみ」の彼女、恋の牢獄の獄丁として、「浄玻璃の絶縁者」として、「悪魔の蠱惑の大手腕より発する強電機」から自分を守ってくれる彼女とは、一体どんな存在であろうか。これが普通一般尋常の恋の相手とは思われないのは、言うまでもあるまい。これこそ仏のごとき存在でなくてはならぬであろう。であればこそ「血、汗、涙の世界」の住人、いわば無明の世界に苦しみ続ける凡夫の自分は、ただひたすら誠実に彼女を恋慕い、その慈悲に救い取られ、その智慧に導かれて悟りに入るべき存在なのである。仏との恋愛とは穏やかでないが、露伴には既に、釈迦を大詩人と呼び、釈迦に恋する女を描いた「毒朱唇」(明23・1)があることは注目していいであろう。

「風流悟」の発表された明治二十四年前後は知識青年の間で、もっとも宗教的な志向が強まった時代であった。背景には時代閉塞の中での将来への不安があり、その志向の中心には「誠実」の問題があつたのであるが今は贅さない。「風流悟」はそのような時代の宗教志向にも合つて、多くの青年を引き付けた。透谷、藤村、独歩いづれもこの作にすばやく反応を示したが、透谷の「我牢獄」(『女学雑誌』明25・6、執筆は前年後半)は露伴とは違う牢獄に苦しむ主人公の苦悩を描いて、一種の「風流悟」批判になり得ている。「我は天と地との間を蠕ひめぐる一痴漢なり」という主人公のキリスト教的人間認識、またそこに発する霊と肉と

に引き裂かれた人間の苦しみは、透谷にあってはそれがそのまま牢獄の苦しみであったが、露伴にあっては、煩惱は人間の力によって、自らの悟りによって解脱できるものであった。「風流悟」の牢獄がついには「樂園」となる所以である。「我は如何に禅僧の如くに悟つてのけん」と試むるとも、我が心宮を覗くこと甚深なればなるほど、我は到底悟つてのけること能はざるを知る」という主人公の言葉は、そのまま、余りに安易に悟りをひけらかす露伴に対する透谷の批判でもあったのである。透谷らの反応はともあれ、「風流悟」の主人公は、悟後の感激を「我は未曾有の歡喜を得たりし、而して我は我が周囲の事物に従前の如く鋭くあたらざるやうなりし、鳥にも獸類にも樹にも草にも和らかくあたるやうなりし、都ての人に親切なる男となりし、而して我は都ての物、都ての人、都て天地間に存するものが皆我を慰むるものなるごときを覚えたり」と語るが、この境地を「五重塔」の朗円上人、ひいては語り手(作者)の境地に結びつけるのは、短絡過ぎるであろうか。「風流悟」という作品は、「井原西鶴」に既に見られ、地獄谷風流書簡、「本箱退治」等、露伴の内部で一年余りに亘って追究され続けてきた「妄想撲滅」の理想が、当然行き着くべき所を示しているといえる。「風流悟」の主人公によって達成された悟り、あるいは作者露伴によっても擬似的に達成されたかもしれない悟りは、無論上記の一連の文章が目指していた小説の方法問題の解決とは必ずしも行かないが、「五重塔」を創作する作者に少なからぬヒントを与え、語り手のスタンスあるいは語り視点という形で影響を及ぼしたのではないかと考えられるのである。

注

- (1) 露伴の引用は、すべて岩波版の露伴全集による。なお、新字体のある漢字は新字体に直し、ルビは適宜省略した。
- (2) 浦井正明「天王寺と五重塔」(『谷中五重塔』昭63・7、谷根千工房刊所収)によれば、モデルの谷中天王寺の五重塔は、天明八(一七八八)年再建開始、寛政三(一七九二)年十月二十三日竣工であった。施工の棟梁は近江国高島出身の八田清兵衛、他に弟子の駒井半四郎、息子の八田清七、実弟の八田助四郎ら合計四十九人の職人が参加したという。なお再建当時の寺名は小説と同じ。
- (3) 「西鶴論の前提」(『国文学解釈と鑑賞』別冊「講座日本文学 西鶴上」昭53・1)。
- (4) 例えば、女房や子どもの年齢からして未だ三十前後と思われる十兵衛が、何処でどのような修行をしたから、誰にも頼らず自力で五重塔を建てようとするほどの自信をつけたのかも、また彼が、何故渡り大工になったかも皆目分らないが、これも近代小説の読者としては落ち着けないところであろう。
- (5) 初出は『新著月刊』(明30・8)、後に「唾玉集」(後藤宙外・伊原青々園編、明39・9、春陽堂刊)に「自作の由来」の題で収録。
- (6) 例えば広瀬朱美氏は源太が「市民としての健全な道理と聡明さ」「デモクラティックな bon sang」の持主だという(「五重塔」結末部への疑義と考察『文芸と批評』平3・9)。
- (7) 例えば笛木美佳氏は「一世一代、腕一杯の物」を作ろうとしている十兵衛にとって、「源太の行為は相変わらずの一方的な施し、余計なお節介、無理解な手出しに他ならない」と言う(「五重塔」論―上人と「御経」の話を中心として『学苑』平12・1)。
- (8) 関谷博「『五重塔』論―『国会時代』前期の露伴(下)―」(『藤女子大学国文学雑誌』第62号、平11・5)参照。
- (9) 「五重塔」の暴風雨―露伴文学再評価のために―(『国語国文学研究』第6号、昭46・4)。
- (10) 理由があるとすれば、小説発表の時期に合わせた、作者のサーピス精神ということになるかもしれない。嵐の場面は明治二十五年三月十六、十八日(因

みに陰暦では二月十八、二十日)の『国会』に発表されているが、小説の時代の暦に直せば一月末にかなり近くなるのである。

(11) 上田篤編「五重塔はなぜ倒れないか」(平8・2、新潮社刊) 参照。

(12) ついでに言えば樋口一葉の「にぎりえ」も、最終章を世間の噂話で締めくくっている。その他章ごとの場面の切り替え法や文体なども含めて、「にぎりえ」は「五重塔」に負っている要素が多いと思われる。

(13) 笹淵友一氏はこの作品を「露伴の小説の中でキリスト教的浪漫主義のもっとも典型的な作品」(『浪漫主義文学の誕生』(昭31・1、明治書院刊)と評価するが、基本的にこの作を支配しているのは仏教思想である。周知の如く露伴の家族は彼が北海道余市に赴任中に、下谷教会の植村正久に洗礼を受け、キリスト教に入信していた。帰京した露伴にも父は入信を勧めたが、彼は教会には通っても、終に洗礼は受けなかった。露伴のそれまでに蓄積した並外れた仏典の素養が、新着のキリスト教を終に受け付けなかったたのである。

(14) 拙著「国木田独歩論」(昭61・5、塙書房刊)「島崎藤村―小説の方法―」(平3・10、明治書院刊) 等参照。